

演題番号：A3

肝蛭浸潤農場における駆虫指導と肝機能改善効果確認

○畑野希枝¹⁾，山田陽子²⁾

¹⁾ 和歌山県紀北家保 ²⁾ 和歌山県紀南家保

1. はじめに：2019年2月に肝蛭症が発生した放牧飼養A農場において同年5月から肝蛭感染牛の浸潤調査を行い、肝蛭駆虫薬投与指導を開始した。当初は投薬時期を放牧直前で指導したが駆虫薬(プロムフェノホス製剤)は成虫のみに効果があること、秋における放牧帰還牛の虫卵数が顕著であったことから、同年11月から投薬時期を放牧直前から放牧帰還直後に変更するよう指導を行った。今回は、投薬時期変更後1年間の肝機能改善効果について調査を行った。

2. 材料および方法：A農場の繁殖雌牛38頭(投薬有26頭、投薬無12頭)について2020年6月、糞便採取および採血を行い、昭和式肝蛭虫卵簡易検査法により糞便中の肝蛭卵検査および生化学自動分析装置により血清中GGT値およびGOT値を測定した。その後肝蛭感染最盛期である夏を放牧場で過ごし、感染後成虫が胆管内に到達する時期とされる10月に放牧から帰還した牛13頭(投薬有10頭、投薬無3頭)について採糞及び採血を行い、同様の検査を実施した。

3. 結果：虫卵陽性率については、投薬時期変更前の2019年11月は投薬有無共に100%だったのに対し、投薬時期変更後の2020年6月は投薬有4.5%、投薬無50%、肝蛭感染最盛

期の2020年10月は投薬有60%、投薬無100%だった。平均GGTおよびGOT値(U/L)の結果については、2019年11月は119.9(投薬有77.3、投薬無183.8)および80.6(投薬有59.2、投薬無112.8)だったのに対し、2020年6月は51.3(投薬有60.1、投薬無32.2)および64.4(投薬有68.0、投薬無56.5)、2020年10月は44.2(投薬有42.0、投薬無51.3)および61.5(投薬有59.9、投薬無67.0)だった。

4. 考察および結語：A農場では放牧中は常に感染源に曝露された環境であるため、放牧帰還後の投薬を行っても秋の虫卵陽性率は春を大きく上回り、完全な駆虫は困難であった。しかし血清中GGT、GOTの平均数値は1年の間に徐々に低下し牛群全体の肝機能改善効果が示唆された。放牧飼養繁殖和牛には手間のかかる定期的投薬を継続してもらうためにもデータを蓄積し投薬による繁殖成績等の改善効果を畜主へ示せるよう今後も指導・調査を継続していきたい。